あたる。多くの美術家、詩人にも言えるが初期作品は「原点」であり、その後の「傾き」を示すものとして重要である。氏の原点は闘病中の切り抜きであった。これは何を意味するのか。これらは、魂の渇きや飢えを癒すものではなかったか。カラー図版を額装して枕もとに置く。すると、ベッドが明るく華やぐ。彼の心も彩られる。これは大川氏にとって新鮮な歓びだったと思う。芸術は魂になくてはならぬ養分なのだ。

後に松本竣介の作品に出合ったのも必然だろう。氏はたちどころにこの画家の精神性に強く惹かれた。そこから「絵は人格である」という言葉が紡ぎだされる。作品は魂の滋養であり、コレクションはあくなき魂の向上の現れなのだ。氏にとって「滋養」が高いのは竣介と野田英夫の作品だった。以後、この二人を要として収集の幅を広げていった。

これらの作品は魂の糧となり、人生を豊かにする。大川氏にはこの実感があった。自身にとって「効き目」があったのだから、他の人々にも有効であるはずだ。なぜならば絵は人格であるからだ。良い絵を観ること、それは素晴らしい人物と出会って魂が高揚するのと同義である。ならば多くの人に良い絵を紹介しなくてはならない。この思いのもと、コレクションを公開すべく美術館を設立する。ここには強い必然性がある。

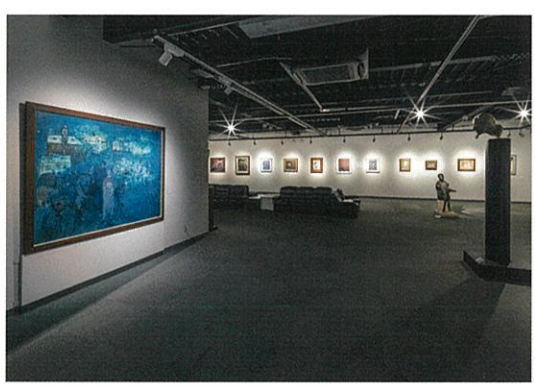
ここにきて、私は、私立美術館と公立美術館の違いを感じざるを得ない。私立美術館のコレクションはその成立に個人のモチベーションがある。コレクターのやむにやまれぬ思いのもと集められた作品は、彼にとってなくてはならぬものである。作品はその都度、彼を助けた。そこには精神的な危機ののりこえもある。コレクションには内的必然性がある。だから力を帯びて観る者に作用する。一方、公立美術館の場合は、その地方や時代において後世に残すべき作品を最大公約数としてセレクトする。地方や時代の記憶やドキュメントとしての役割は果たすが、コレクターにあった内的モチベーションは乏しい。

観る者に伝わるのは私立美術館のコレクションの方ではないか。公立美術館のコレクションはややもすれば「標本」やショーウィンドーに転落してしまう。これでは感動は生まれない。これをいかにして回避するか。それにはまず作品の良さを美術館人が身をもって体験する必要がある。作品を集めるにあたり、自身の魂のうち震えを頼りにする必要がある。そうしなければ他者には伝わらない。地域や時代の限定はあっても、十分成しえることだと思う。というか、成さなければならない。

私は再び大川氏の「芸術はお金と関係ない」という言葉を思い出す。芸術作品は、日の光や泉のようなものなのだ。日光や泉はただ降りそそぎ、湧きいづる。そこには何ら金銭は関わっていない。作品もまた誰に頼まれるでもなくそこにある。私たちは、それを求めて歩めばよいのだ。光を浴びるべく、泉を掬すべく、作品に会いに行く。それが芸術作品の本来の佇まいだと思う。

大川美術館は、さながら陽だまりや泉のようだ。元デパートの社員寮だったという建物は、作品との親密度を高めてくれる。どんなに時代が変化しようとも作品は留まり続ける。留まるものを提示する美術館は魂のよりどころである。そうした意味で大川美術館は大事な使命を果たしている。

（足利市立美術館　次長・学芸員）



展示室風景（撮影：木暮伸也）

【研究ノート】

曽宮一念による松本竣介宛書簡３

小此木美代子

前号139号では、1937年3月31日付、4月12日付、4月13日付、4月16日付、4月19日付の5通を紹介した。本号では、1937年6月初旬から8月20日付までの5通を紹介する。これで、現在確認できる曽宮が竣介に宛てた書簡15通の紹介は、ひとまず一区切りとしたい。

曽宮は1937年7月、独立美術協会を退会し国画会に所属する。前年頃からは画商の往来が始ま

り、生活に困ることが少なくなっていく時代である。竣介夫妻は、引き続き『雑記帳』の編集発行に忙しい毎日を送っている。曽宮はこの頃も夫妻に執筆者を紹介し、内容のみならず依頼の仕方にいたるまで詳細な助言を与えていた。なかでも1937年6月7日付では、自身面識がないままに野口謙蔵を紹介しており、当時の曽宮自身の関心の一端を読み取ることもできる。※7月5日付、13日付では、竣介夫妻が所持していたと思われる「画」をめぐるやり取りがあり、夫妻が「画」を手放し『雑記帳』継続のための資金づくりにあてようとしている切迫感がうかがえた。8月20日付で曽宮は、『雑記帳』の継続を祈りつつも「しばらく文はタネギレになります　あしからず」と書き送り、この一通を最後に、続く書簡は現在のところ見つかってはいない。これ以後の両者について、以下少し触れておきたい。

曽宮は、1937年9月から翌年にかけて約1年間、カリエスの疑いで富士見高原療養所に入院した。ギブスベッドのうえでスケッチをして過ごす日々を送る。その後は療養しつつも各地に取材旅行を重ね、風景画家としての地歩を確立していった。1944年には静岡に疎開し、戦後は富士宮市に居を定め、奔放な筆致と色調による風景画の制作と随筆の執筆とを続けていくこととなる。

竣介は、1937年9月に第24回二科展に《郊外》（宮城県美術館蔵）を出品。禎子はこの頃、主婦之友社に入社し編集部に勤務するようになる。そして同年12月、『雑記帳』は資金難のため廃刊。一年後には初期の代表作《街》（当館蔵）を発表し、以後下落合のアトリエを拠点に制作に没入していく。アトリエ内に掲げられた「綜合工房」の看板は終生おろされることはなかった。

曽宮と竣介は、『雑記帳』の創刊から終刊までの一年間に重なるように交流が持たれた。その熱気を帯びた交流は『雑記帳』の終わりとともに途絶えてしまったということだろうか。

ところで書簡を読み感じているのは、複数の視点からの考察の必要である。今回は、曽宮一念のご遺族と研究会のご厚意によって、曽宮の同時期の日記を断片的ながらも読み合わせることができた。とはいえ、全体を見渡した十分な調査には至れなかった。

書簡中の「画」（曽宮の日記中では「萬氏の画」）については調査が中途となった。読書家の曽宮と竣介の書物を通じた影響関係、画家と画商、出版社との関わり、さらには耳の不自由な竣介に代わって『雑記帳』編集をめぐり禎子夫人が果たした役割の重要性等々、今後考察すべき多くの課題を残すこととなった。行間から浮かび上がってくる様々な事項の絡まりを、彼らが過ごした時間を辿るなかから引き続き探っていけたらと思っている。

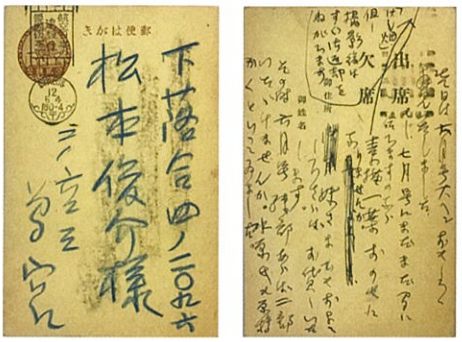
本連載にあたり、曽宮夕見氏（曽宮一念長女）、松本莞氏（松本竣介次男）、江崎晴城氏（曽宮一念研究会）にご教示賜り、貴重な資料の提供をいただきました。記して謝意を表します。

（当館学芸員）

※曽宮は『美術』（1937年8月1日発行）に「舟上の握りめし」と題した野口謙蔵論を寄せている。これによれば、帝展で見た《霜の朝》以来、野口の絵に惚れ込んだ曽宮がこの年の6月頃ようやく野口に手紙を出し「面識の無い友人となつて、やつと一ヶ月餘になる。」とある。

【松本俊介宛　1937.6.4　消印】

［なにかの出欠返信はがきの印刷入り］

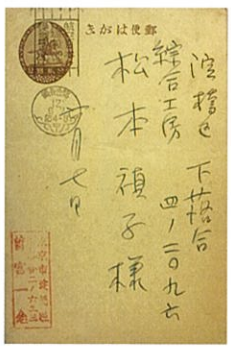


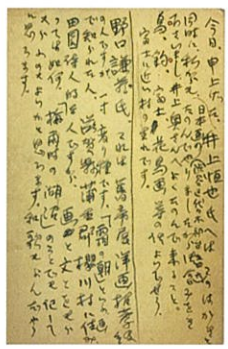
先日は六月号大ヘンおもしろく
拝見いたしました。
もし、七月号にまだまだ間に
合ひますのなら
素描一葉※おのせに
なりませんか。
妹さまでもおよこ
し下さらばお貸しいた
します。
その時六月号残部あらば二部
いたゞけませんか。水原氏も原稿
かくといつてゐました。
［欄外　文中の「素描一葉」から矢印が出て、］
「けし畑」
　但し
　撮影後は

すぐご返却を
ねがひます

※『雑記帳』第9号（1937年7月1日発行）p4に掲載されたけしの花が描かれた「素描」と推察される。この日の曽宮の日記発信欄に松本俊介の名が記されており、「夕方、けし素描したがうまくゆかず、」との記述あり。

【綜合工房　松本禎子　宛　1937.6.7　消印】



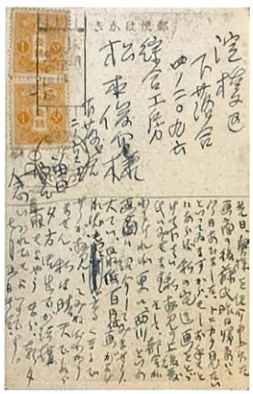


今日、申上げた※1、日本画の井上恒也※2氏へは
このはがきと同時に、私からも、たのんでやりま
したから御含みをき下さいまし。井上奥さんへよ
くたのんで来ること。
鳥、釣、富士、花鳥画等の話よいでせう、
富士に近い村の生れです。

野口謙蔵※3氏、これは舊帝展洋画推薦後
の人ですが、一寸変り種です。「霜の朝」と写画
で知られた人、滋賀縣蒲生郡桜川村に住み、
田園詩人的な人ですから、画と文とをもら
ってはは如何。「梅雨時の湖沼」のことでも記して
もらふのもよいかと思ひます。和歌もよんだやう
に思ひます。

※1　この日の曽宮の日記には、「午前、松本禎子氏来る、素描を渡す」とある。曽宮はこの日のうちに本状を投函し、執筆依頼の報告をしている。
※2　井上恒也（1895-1979）は、大正から昭和にかけて活躍した日本画家。富士市の大地主の家に生まれる。東京美術学校に学び、寺崎広業・川合玉堂に師事。帝展・日展で入選を続け、花鳥画を得意とした。自然を丹念に観察し精密な写生に基づく鮮やかな彩色で、独自の花鳥画の世界を確立した。『雑記帳』第12号（1937年10月1日発行）に「秋の鳥・二題」と題したエッセイを寄せている。
※3　野口謙蔵（1901-1944）は、昭和初期に活躍した洋画家。現在の滋賀県東近江市の裕福な近江商人の家系に生まれる。帝展で特選を重ね、新文展の審査員を務めるなど将来を嘱望されたが43歳で逝去。ときに自身の画に「近江野謙」とサインを入れるほど、近江の風土を愛し、しばしばその画題とした。曽宮の葉書文中にある「霜の朝」は1934年第15回帝展特選作のことであろう。現在東京国立近代美術館所蔵。『雑記帳』第9号（1937年7月1日発行）にデッサンが1枚と、『雑記帳』第10号（1937年8月1日発行）に「湖沼雑記―夏の景物」と題したデッサンと文を寄せている。

【綜合工房　松本俊介　宛　1937.7.5　消印】
［若狭高浜　海水浴場風景の葉書］



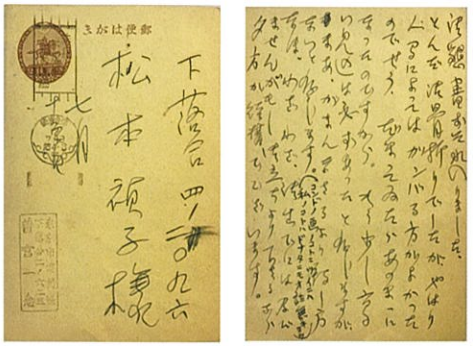
先日、奥様を紹介申上げた
画商の後藤氏※1昨日帰京にて
今日あひました。トニカク見たい
といってゐますから、もしお手もと
にあらば私の宅迄画※2をとゞ
けて下さい　私拝見の上後藤
氏にみせます。そして、都合が
わるければ更に、西川※3といふ
画商に紹介してみませう。
大てい、最低百円位画がよけ
ればもつと高くなるで
せうが、拝見してみねばわかり
ません。私は晴天でしたら
夕方御出でが結構
雨もよやうなら、朝夕
いづれでもよいのです。
七月五日午后

［裏面］
日動の方で
きまつてゐまし

たらムリ
に当方へ
御持ちには
及びません
が、その時は
一寸
おしらせ
下さいまし
後藤氏にみせ
るのは早い方が
よいやうです。

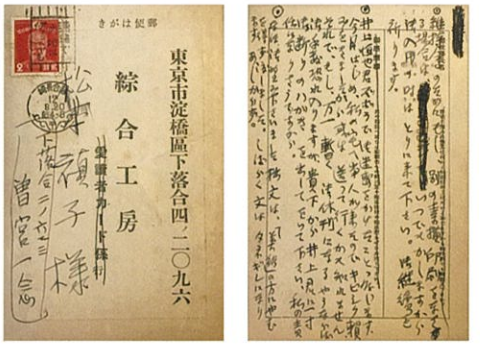
※1 「後藤氏」とは、後藤真太郎（1894-1954）であろう。翌年の1938年、曽宮初めての著書『いはの群』を出版した座右宝刊行会社長。専門出版・編集者として特異な存在として知られる。東西古美術品の蒐集家でもあった。
※2 前日にあたる7月4日の曽宮の日記には、発信欄に「松本」の名が記されているものの書簡の存在は不明。また同日の記述には、「午前、後藤氏来る。萬氏の画のことをたのむ。」とあり。本はがき文中の「画」と、曽宮の日記中の「萬氏の画」は同一と推察される。なお「萬氏」とは、萬鉄五郎（1885-1927）ではなかったか。また、同日7月5日の日記には、「夕方松本夫人来る。萬氏の画は先方で返してくれぬ由」との記述あり。禎子は、曽宮からの葉書が到着してすぐ、曽宮の言う通りその日の夕方に訪ねていることになる。日記中の「先方」が誰にあたるのかは不明だが、「萬氏の画」を手放して資金を得ようとしている様子がうかがえる。松本夫妻がこの5ヶ月後には『雑記帳』を廃刊した事情を考えると、『雑記帳』継続のための資金調達に困難を極めていたことが垣間見られる。具体的迅速に協力しようとしている曽宮の行動力に夫妻はどれだけ心強さを感じていただろうか。
※3 兜屋画廊主・西川武郎と思われる。

【松本禎子　宛　1937.7.13　消印】



御懇書おそれ入りました。
とんだ御骨折りでしたが、やはり
人為によってはガンバる方がよかった
のでせう。だまってゐたらあのまゝに
なったのですから。もう少し高
い見込は必ずあったと存じますが、
まあ、がまんなさるより致し方
ないと存じます。（コンドノ画ノコトニツイニ（ママ）
ハ私ノコトハドナタニモオ話無キヨウ）
なほ、わざわざ御出でには及び
ませんがもし御立ちより下さるなら
夕方が結構でございます。

【松本禎子　宛　1937.7.13　消印】



◎維持費のためにもし、別の素描、印刷をなさ
る場合は、いつでもかしますから
御入用の時はとりに来て下さい。ご継続を
祈ります。
◎井上恒也君※1 ズボラでご迷惑をかけたこと、
存じます。
今月はじめ、私の宅へ当人が来たので、キビシク
頼みをき、ましたから或は送って行くかも知れま
せん。それで、もし、万一暫く御休刊になるやう
ならば御手数恐れ入りますが、貴下から井上君に
一寸御断りのハガキを出してをいて下さい、私
の責任に成りさうですから。
◎なほ、御望みくださいました拙文は、「美術」※2
の方にやむを得ず渡しました。しばらく文はタ
ネギレになります　あしからず。

※1 6月7日付葉書で曽宮が『雑記帳』への執筆者として紹介していた井上恒也と思われる。『雑記帳』第12号（1937年10月1日発行）にエッセイが掲載されていることから、この時点でまだ原稿がもらえていなかったのだろう。
※2 1937年、曽宮は次の2本の随筆を『美術』に寄稿している。「野口謙蔵論　舟上の握りめし」（昭和12年7月）1937年8月1日発行、「けし畑」（昭和12年6月）1937年9月1日発行。

編集
発行　公益財団法人　大川美術館　〒376-0043　桐生市小曽根町3-69
TEL 0277-46-3300
FAX 0277-46-3350
URL.http://www.okawamuseum.jp